

2024年3月31日「三日で建てる」

ヨハネの福音書2章13～22節

今朝はイースター（復活節）の朝です。復活の主イエス・キリストを覚えつつ、この聖書箇所から学んでいきます。

### 1. 宮きよめ (13～16節)

①エルサレムへ (13)「ユダヤ人の過越の祭りが近づき、イエスはエルサレムに上られた。」

ユダヤの三大祭は過越の祭、七週の祭、仮庵の祭です。過越の祭は、出エジプト記にあるように、イスラエルの民がエジプトから救い出されたことを記念しています。ニサン（3～4月）の14日に祝われました。イエスは、その祭を前にしてエルサレムに行かれたのです。

②宮の中で (14)「そして、宮の中に、牛や羊や鳩を売る者たちと両替人たちがすわっているのをご覧になり、

イエスが宮の中に入ると、当時の人々には見慣れた光景ではあったでしょうが、牛や羊や鳩を売る者達がありました。これはどういうことでしょうか。民はエルサレムに礼拝をささげるために来ました。礼拝は犠牲をささげることでありました。しかし献げる動物を、家から連れて来るのには、大変な労力がかかります。そこで、いつの頃からか、宮に来ればそこで犠牲を調達できるようになっていたのです。動物を購入し、聖所に連れて行き、それを犠牲としてささげるという在り方が当たり前になっていたのです。そして、そこには両替人までいて、支払いの助けをしていたのです。

③宮から追い出し (15～16)「細なわでむちを作って、羊も牛もみな、宮から追い出し、両替人の金を散らし、その台を倒し、また鳩を売る者に言われた。『それをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家としてはならない。』」

ところが、イエスは細なわから作ったむちを用いて、羊、牛などを宮から追い出し、両替人の金を散らして台を倒したのです。鳩を売る者には、「それを携えて、ここから去りなさい。父の家を商売の家としてはなりません。」と言われたのです。そこには妥協は一切ありませんでした。

### 2. どんないしを (17～22節)

①家を思う熱心 (17)「弟子たちは、『あなたの家を思う熱心がわたしを食い尽くす』と書いてあるのを思い起こした。」

この様を見ていた弟子たちは、旧約の詩篇69:9にある言葉を思い出しました。そして、その詩篇は、この出来事を預言していたのだと思いました。つまり、主イエスが神の家を思う熱意は、徹底的でいささかも揺らくことないものであると、確信したのでした。

②ユダヤ人の抗議 (18)「そこで、ユダヤ人たちが答えて言った。『あなたがこのようなことをするからには、どんないしを私たちに見せてくれるのですか。』」

しかし、ユダヤ人たちは黙っていません。「自分たちの信仰に基づく



風習を、このような方法で否定するとは何たることか。これほどのことをするなら、どんなしるしを見せてくれるのか。」と迫ったのです。

③この神殿を (19)「イエスは彼らに答えて言われた。『この神殿をこわしてみなさい。わたしは三日でそれを建てよう』」

するとイエスは驚くべきことを言われました。『この神殿をこわしてみなさい。そうすれば、わたしは三日でそれを建てよう』と。それはおよそ、実現不可能だと思われることです。

3. 復活の預言 (20～22 節)

①四十六年 (20)「そこで、ユダヤ人たちは言った。『この神殿を建てするのに四十六年かかりました。あなたはそれを、三日で建てますか。』」

ユダヤ人たちは批判しました。目の前にある神殿は、ヘロデ大王の時代の紀元前 20 年ごろから、紀元 26 年にわたって建築され、ようやく完成した神殿です。「それを三日で建てるとは、ほら吹きそのものではないか!」と罵ったのです。

②ご自分のからだのこと (21)「しかし、イエスはご自分のからだの神殿のことを言われたのである。」

実を言えば、主イエスは神殿のことを言いながら、御自分が十字架にかかって死に、葬られて三日目に復活することを、語っておられたのです。しかし、この話を聞いた時に、誰がそのことを理解したでしょう。想像すらできないような事柄でした。主は十字架や復活の預言をしていたのですが、この話を聞いて、復活のことを考えた人はいなかったでしょう。

③よみがえられた時に (22)「それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われた言葉とを信じた。」

それが理解されたのは、キリストが多くの人々に愛をもって教え、いやし、慰め、強め、奇蹟の業などの働きをなされた後でした。多くの民の叫びによりピラトの決定で十字架につけられた後に、よみがえられた時に、弟子たちはやっとわかったのです。「そうだ。あの時に主イエスが言われたことはこういうことだったのだ。今あのお言葉が実現したのだ。」と彼らは聖書の御言葉、イエスのお言葉を信じたのでした。

《結論》

長い牧会生活ですが、イースターの主日に、この聖書箇所から学ぶのは初めてです。その理由は、この聖書箇所はキリストの宮きよめの記事であり、それを復活節に開くことにはためらいがあったからです。しかし、今朝はこの聖書箇所から復活の主を学んでいきたいと思えます。

まずは、キリストの宮きよめ関係です。この記事は三つの共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)のいずれにも記されています。しかし、それらは、どれも受難直前にエルサレムに入城されたあたりの出来事と考えられます。ところが、ヨハネの福音書の記事は主イエスの宣教開始からそれ

ほど時が経っていない時期です。つまり、キリストの宮きよめの出来事は二回あったということです。どうして、キリストはこのようなことをなさったのかと思われる向きもありましょう。宮で商売をしていた人達とて、いわばそれで生活をしているのに、かわいそうではないかと同情する人もいるでしょう。日頃から愛を説いているイエス・キリストなのに、どうしてなのだと思問に思われるかもしれません。もちろん主イエスは彼らのことも愛し、配慮されていたことでしょう。しかし、キリストは義をどこまでも通されました。先々週に歌った讚美歌 262 番に「十字架のもとぞいとやすけき 神の義と愛の あえるところ」とあります。キリストの愛と義は、キリストの十字架に至って、究極的に結びつくのです。イエス・キリストはこの宮きよめを通して、旧約時代からの犠牲制度を廃止させようとしていたのです。つまり、神であるキリスト御自身が一度限り犠牲となって十字架の上で死ぬことにより(ヘブル 9:28)、赦しの恵みが確立されるために、主は大ナタを振るわれたのです。十字架の福音を知っている私たちは、今こそキリストご自身が犠牲となってくださったという驚くべき恵みを確かめましょう。

その上で、今朝の聖書箇所 19 節で「この神殿をこわしてみなさい。わたしは三日でそれを建てよう」と言われたお言葉に注目したいのです。これは、イエス・キリストご自身が十字架につけられてから三日目によみがえることを預言しておられたのです。それは、弟子たちは何のことかよくわからずに三年余りを過ごしました。そして、主がよみがえられたときに、彼らはこの宮きよめの時に言われたお言葉を思い出したのです。

ところで、イエス・キリストはここで神殿を三日で建てると言われましたが、あなたは神殿という建物と、「よみがえり」と比べてみたら、どちらに価値があることだと思いますか。実を言うと、そこにいたユダヤ人たちにとっては 46 年もかかって建てられたヘロデ神殿は誇りでありました。それはそれで良いのです。しかし、それはいかに貴重な建物であっても、寄りすがらなものではありません。かつて神殿が完成した時に、ソロモン王は「実に、天も、天の天も、あなた(神)をお入れすることはできません。まして、私の建てたこの宮など、なおさらのことです」(I 列王 8:27)と述べました。それは実に見事な宣言でした。ソロモンなら、キリストが三日目によみがえるということは、歴史的な宮以上に重要で価値あることだと言うことでしょう。それは、そこにいた人々だけではなく、時代を越えた人々にとっての希望です。民族、能力、経歴などは一切関係なく、復活の主は喜びであり力です。

先週、どなたかはわかりませんが、中京地区に住む男性の方から電話がありました。「自分は内気なので、うまく人と話したりできません。こんな者でも救われますか。教会に行っても良いのですか」というものでした。「もちろんです。十字架にかかり、復活されたイエス様はあなたの事を覚えてくださっていますよ。」とお答えしました。安心されたようでした。私たちも、弱い者たちですが、この復活の主によって救われ、生かされているのです。復活の主をともに仰いでいこうではありませんか。